

平成28年度 地理歴史・公民科新任教員研修会 研修報告書

1 研修目標 県内の地歴・公民科の初任者教員が、研修実施校の初任者教員による授業を見た後、授業反省会で意見交換することにより、お互いの授業力を高める。

2 実施日時 平成28年10月27日(木) 10:45~15:40 (受付 10:45~)

3 研修会場 学校法人信愛学園 浜松学芸高等学校  
〒430-0905 浜松市中区下池川町34番3号  
TEL : (053)471-5336 FAX : (053)475-2395

4 参加者 地歴・公民科新任教員(1~5年目)等 31名参加

5 日程

1 受付 10:45~11:15 事務室前 地歴公民部会理事にて実施

2 開会 11:20~11:40 北館会議室(北館1階)

学校代表者 挨拶 浜松学芸中学校・高等学校 校長 内藤 純一

浜松学芸の授業の特色

シラバスにもとづく授業展開

近年教職員の研修を実施、各教科の「求める授業像」を構築

地歴・公民の求める授業像は

「身近に感じる社会」 興味関心を高める授業

知識学力を確立する授業

自己表現力を身につける授業

以上のことが授業で実践されているか否か、研修参加の先生方に参観していただき講評していく形となった。

3 研究授業 11:50~12:40 (本館 4階 17HR)

科目 世界史A 授業单元 世界恐慌と全体主義

授業実施者 渥美 創 先生

12:40~13:40 (北館会議室) 北館会議室にて昼食(弁当を用意)

13:45~14:35 (本館 3階 25HR)

科目 地理B 授業单元 発展途上国の農業

授業実施者 大木島 詳弘 先生

4 学評会 14:40~15:30 北館会議室(北館1階)

5 連絡事項 15:30~15:40

6 閉会 15:40

今回の研修には、授業者として実際に研究授業を行う立場で参加した。授業は、高校1学年の世界史Aにおける「ナチスドイツの台頭」の単元にて行い、30名あまりの先生方にみて頂くことが出来た。授業そのものは、世界恐慌発生以後各国が対応に追われる中で、「ドイツにおけるナチ党の伸長」「ヒトラーの権力掌握」及び「ラインラント進駐(1936年)までのドイツの対外進出」がどのように行われたのかを、図像資料・資料集掲載の一次史料・手書きの略地図などを用いて学習する、という流れで進めた。

参観いただいた先生方からは、貴重な指摘を多数受けることが出来た。それらを通じて今回見えてきた自己課題は、以下の2点である。1点目は、「授業内で何を強調したいのかを明確化すること」である。声の抑揚や声量に関して、「強弱が無さ過ぎる」という指摘に関しては、以前行った研究授業で反省したはずの内容であり、教材研究の甘さや事前準備の不徹底を自分の中で改めて認識した。「生徒に何を理解させたいのか」をはっきりと意識し、その部分を強調したヤマ場を設けていかなければ、1時間の授業全体で印象がぼやけてしまい、生徒の頭に残るものが限りなく薄いものになってしまう。板書計画を含めた授業準備を徹底し、声の強弱や発問の仕方、生徒・教員双方の動きを含めて「生徒に理解・定着させたい部分」を明らかにした授業ができるよう、今後改善を重ねていきたい。2点目は、「生徒の実態に合わせた授業展開を意識すること」である。世界史Aに関して言えば、現在私は4つのクラスで授業を受け持っている。生徒の得意・不得意、授業への積極性、クラス内の雰囲気は、当然各クラスで異なる。生徒の理解を助け、授業における学習効率を最大化するためには、全クラスで同じような紋切り型の授業を行うのではなく、各クラス・各生徒の「カラー」に合わせた授業の展開を考えなければならない。例えば、用語の暗記が苦手な生徒が多ければ授業中積極的に復習の機会を設ける、内容説明・要約が苦手な傾向があるのなら自分の頭で授業内容を整理・表現させるようなまとめの時間をとる、等がそれにあたると思われる。丁寧な教材研究を行うことはもちろん、授業中を含めて生徒とのコミュニケーションを大切に、それぞれの生徒にとって最も頭に残りやすい授業のイメージを常に模索し続けることを意識していこうと思う。

今回の授業では、発展途上国の農業の事例として、エジプトの農業政策と問題点について実践を行いました。実践内容は、前半をシミュレーション教材を使用した班ごとの活動型で、後半は事例を深めていく講義型で、最後は今回の学習範囲を実際のセンター系の問題で例示するという流れで実施しました。

前半のシミュレーションは、発展途上国の農業として、自給的農業としてナイル川の洪水による偶発生によって年ごとの収穫量が左右されるという内容と設定しました。6面サイコロを2つ用いて、毎年の洪水の高さを決定し、それにより自分たちの畑の収穫量を決定し、ワークシートに記入するという流れとなります。設定した10年に到達することなく、途中で終了してしまうケースが多くみられ、安定しない収穫量は生活を不安定にすることを体感させることができました。

また、後半の講義型の授業では、ナイル川の治水対策としてアスワンハイダム建設を取り上げ、農業地域の変化やダム建設の効果について略地図を用いながら解説を行いました。略地図に書き込むことで、現象を面としてとらえどこで・どのようにして・なぜ起こるのかという視点を養うよう注意しました。多目的ダムの建設により、治水面や灌漑用水の確保は可能になりましたが、その一方で塩害の発生や沿岸部の後退など問題も発生しており、現象を1面的ではなく多面的にとらえることができるような授業を目指しました。

最後は、統計資料から作成したエジプトの農業をあつかうセンター形式の問題演習を班ごとに行いました。得意な生徒が苦手な生徒に教えることで、生徒間での教え合いや問題をとくコツの共有を行うよう心がけています。

\*学評会進行 は以下の形で進化した

グループ別に着席（座席をブース型に設定

- ①授業担当者の反省自己評価（渥美・大木島）3分×2
- ②グループワーク（司会は理事、発表はG内で決定）15分
- ③グループ代表発表3分×6
- ④授業担当者応対自己評価3分×2
- ⑤講評 内藤純一先生

学評会はアクティブな形で実施してみることにした。30名を6つのグループに分けて、東部、中部、西部均等に配分されるよう主催者のほうで振り分けを決めさせてもらった。そのグループに部会の理事が1名入り、グループワークの司会進行を行った。まず授業担当者の授業に関する振り返りを簡単にしてもらい、その後グループワークで2人の授業について感想や意見、改善点などを話し合ってもらった。その話し合ったことを理事以外の新任5年目以内の先生に発表してもらうこととした。グループワークの時間を15分としたが、2つの研究授業について6人が話し合う時間としては少し短かったと反省している。25分は必要であったと思う。内容的に活発に意見が出て、2人の授業担当が今後の授業内容の改善に役立てる形になったし、また、新任の先生方も学芸の2人の教員の授業を参観して、自分の授業との比較の中でご自身の改善点を見つけることができたと感じている。